

ふくふく がんばる版

麻生教育サービス株式会社 URL <http://www.aso-education.co.jp/>



特集①
Special
Interview

認知症は予防できる! 改善できる!

— 認知症重度化予防実践塾

2014
VOL.92

特集②
Pickup
Report

早期発見・早期治療が大切な認知症のために

— 認知症かかりつけ医・認知症サポート医

AES
ASO EDUCATION SERVICE CO.,LTD.

早期発見・早期治療が大切な認知症のために

認知症かかりつけ医・認知症サポート医

認知症は早期に対応すれば、進行を遅らせたり、改善が期待できる疾患であります。そのため認知症かかりつけ医・認知症サポート医が全国で整備されつつあります。福岡県医師会常任理事の瀬戸裕司先生に伺いました。

身近な「かかりつけ医」に認知症の知識を増やす取組み

今後ますます増え続けるであろう認知症に対して、専門医療を提供する医師や医療機関は不十分です。一方で認知症は早期発見・早期治療が重要な疾患ですが、患者の家族のみならず、医療関係者にも理解が不足している側面があります。そこを補い、認知症に対する治療が早期に適切に行われるよう、厚生労働省が主導して整備されているのが「認知症かかりつけ医」および「認知症サポート医」の制度です。

認知症かかりつけ医は、いわゆる地

域のかかりつけ医が認知症に関する正しい知識と理解を持ち、発症初期から適切な対応ができるよう支援する取り組み。認知症に詳しいかかりつけ医ばかりではないため、初期症状を見逃したり、適切な対応ができずに症状を悪化させるケースもあります。さらに、かかりつけ医への助言などの支援を行い、専門医療機関などとの連携を推進するのが認知症サポート医です。

瀬戸先生は「800万人ともいわれる認知症患者は、とても専門医だけで診られる疾患ではありません。早期に気づいてもらうとともに、日常生活に支障がない程度までは地域で対応して

もううことが目的です」と語ります。また認知症は早期に発見すれば薬などで進行を遅らせたり、中にはホルモン治療などで改善できる例もあります。そのタイミングを逃さないためにも初期の対応が重要なのです。

隠れた大きな課題である家族のサポートにも役立つ

認知症で問題となるのは患者だけではありません。その家族も大きなストレスを抱えがちですが、家族への支援は十分とはいえない。そんな時も身近に認知症に詳しく、専門機関などへつないでくれる医師があれば安心です。「認知症であることを家族が受け入れるには大きなストレスがかかり、どこに相談をすればいいかも分からぬでしょう。そうしたサポートも担う制度なのです」と瀬戸先生。

認知症は生活習慣病と密接な関係が



福岡県医師会 常任理事
瀬戸 裕司さん

Profile
ゆう心と体のクリニック院長。名古屋保健衛生大学医学部卒。藤田保健衛生大学大学院医学研究科修了。2003年より心療内科・精神科・精神科を専門とするクリニックを開院。福岡県医師会をはじめ公職も多く、講演活動なども積極的に行う。

自治体訪問

[大牟田市]

大牟田から広がる認知症ケアの取り組み

市民の声を反映して始まつた各種事業

SOSネットワークは徘徊行方不明者を隣近所、地域ぐるみ、多職種協働で見守り、保護していく取り組み。徘徊行

見守り支えていく地域をつくっていくことが重要なのです。

認知症をきっかけにした地域づくりが広がる

行方不明者は市町村を越えて移動す

ることもあります。そのため平成24年5月から県南の12市町が参加した「ちくご高齢者等徘徊SOSネットワーク」、さらに平成25年3月から大牟田市ワークもスタート。実際に市域を越えて保護された高齢者もいるそうです。

加えて地域での連携も生まれています。例えば小中学校で認知症について理解を深めた結果、行方不明者を保護したり、ボランティアに取り組む中学生や高校生もいます。子どもたちの親も興味を持つようになり、SOSネットワークに登録する人もいるそうです。



大牟田市では小規模多機能型居宅介護事業所を利用する。介護サービス事業所をなつたら小規模多機能型居宅介護事業所を各小学校区に設け、ここに必ず地域の交流拠点となる地域交流施設が併設されています。元気なうちはこの施設を活用してもらいましょう。

貴重な地域資源として最大限に活用してもらうためです。事業を担当する大牟田市の井上泰人さんは「人々が地域で暮らし続けるためには地域の力が必要。連携することで行政だけではできないことができる。これは認知症をきっかけにした地域づくりだと考えて



います」と語ってくれました。

かつて炭鉱で栄えた大牟田市は人口減少や高齢化が進み、平成26年現在で高齢化率約32%。認知症ケアに対する取り組みが平成14年よりスタートしました。市民アンケートでの声を反映し、人づくりとしての認知症コーディネーターの養成、早期発見・早期対応を目的としたもの忘れ予防・相談検診、認知症について学ぶための小中学校絵本教室や認知症サポートセンター養成講座、万が一の徘徊行方不明者に備える介護が連携した認知症サポートチームなどが行われています。とりわけSOSネットワークへの注目度は高く、他の多くの自治体が取り入れ始めている事業です。



地域の子どもたちも参加する徘徊模擬訓練

始まつた各種事業

地域の子どもたちも参加する徘徊模擬訓練

地域の子どもたちも参加

福祉現場における「CS運動」と「人材育成教育」

CSとは顧客満足度(Customer Satisfaction)を意味する言葉で、一般企業では製品やサービス向上のための重要な方策のひとつとされています。介護福祉の分野でこの考え方を取り入れている数少ない施設が北九州市八幡西区の「聖ヨゼフの園」です。民間企業に勤めていた木戸邦夫理事長が約10年前に着任したのをきっかけに、CS運動および人材育成教育に取り組むようになりました。「社会福祉法人であっても、施設の経営を行い、利用者の顧客満足度を追求するのは一般企業と同じ。民間で当たり前のことだが、行われていないことが不思議です」と木戸理事長。

介護福祉の分野ではなじみのない取り組みだけに、最初は職員の待遇面の改善や人事考課制度づくりに力を入れたそうです。「顧客満足だけを追求しても職員のモチベーションは上がりません。まず自分たちの仕事が正当に評価される仕組みをつくり、その上でCS運動や人材育成教育で職員の社会性を

育成していきました」。その結果、今では職員自らが改革に取り組むようになっています。CS運動をさらに推し進め、ES(従業員満足度=Employee Satisfaction)運動にも取り組んでいます。職員自らが満足できる職場環境をつくる運動です。

聖ヨゼフの園は70年近い歴史があり、キリスト教精神に基づいた質の高い介護を行っています。素晴らしい伝統がある一方で、歴史があるゆえの課題もあります。それは仕事の形が固まってしまい、変化を起こしにくいことです。「以前からやっているから」という理由だけで、あまり考えずに効率の良くない仕事をしているケースもあります。「時代とともに求められる介護のあり方、接遇のあり方は変わっていくはずです。伝統のあるところは変化に弱い。けれども生き残って業界の老舗になるためには変化する必要があります。聖ヨゼフの園の歴史を次の時代へ残していくためにも、職員が変化することは重要なことです」と木戸理事長は語ってくれました。



社会福祉法人 援助会
聖ヨゼフの園 理事長 木戸 邦夫さん
●ホームページ <http://www.st-joseph.or.jp/>



素肌と同じ弱酸性素材を採用！

吸収体表面材

パルプ層

※吸収体の表面材とパルプ層のpH値を、弱酸性に調整しています。

人間の皮膚表面はpH4~6程度の弱酸性と言われております。アルカリ性に傾くことは肌トラブルの原因の一つとされています。本品の吸収体(表面材・パルプ層)は皮膚と同じ弱酸性に調整されており「おむつ内環境の改善」が期待されます。サルバでは、パンツタイプ・テープ止めタイプと高吸収パッドである“朝まで1枚ぐっすりパッド”“尿とりパッドパンツ用”“お肌にやさしい吸水パッド”に、弱酸性素材を採用しています。



サルバ
安心Wフィット



サルバDパンツ
しっかりガード
長時間



サルバDパンツ
やわらかスリム
うす型スーパー



サルバDパンツ
すっきりシルエット
うす型下着感覚



サルバ
朝まで1枚
ぐっすりパッド
夜用



サルバ
尿とりパッド
昼用



サルバ
尿とりパッド
お肌にやさしい
パンツ用

素肌と同じ
弱酸性素材

※吸収体の表面材とパルプ層のpH値を弱酸性に調整しています。